

ふるさと熊野

筆道資料の探訪

榊山神社の石造遺物と玉垣銘文

榊山神社は、明治の初めまでは大宮八幡宮といった。

正徳五年火災にあい伝来の宝物、古文書を焼失した。

享保六年（一七二二）四月当国の大守松平安芸守吉長の免許を受け
用材を下賜せられ、同九年十一月約三歳半を費やして神殿が再建され
ました。

享保九甲辰歳 当社

御本社御殿再興 神主 梶山甚大夫

大工 大阪 宮屋六良兵衛

庄屋 萩原 馬々新右衛門

享保九（一七二四）甲辰九月 願主 萩原庭馬々

石燈籠 二ツ 宗像新右衛門

享保九甲辰九月 願主 紺屋垣内

石手水鉢 一ツ 太良右衛門

（再掲） 奉献願主 孫居田正三朗

安政六（一八五九）己未九月吉辰

奉献願主

安政六年 末 九月吉祥日

渡辺勘三朗

渡辺玄正

隼田源兵衛

尾道 東屋半次良

広村 有田屋庄三朗

広島 今田屋弥助

奈良 秋田屋小兵衛

大阪 楠本利兵衛

大阪 菱屋与三兵衛

有馬 灰吹屋弥右衛門

大阪 信濃屋善助

有馬 一文字屋与平

有馬 小田原屋庄三朗

有馬 江戸屋久兵衛

毛筆元祖頌德碑

筆といへは熊野を思ひ熊野といへは筆を想ふ熊野筆の声価は実に天下に冠たるものである。

抑熊野筆の由来は弘化（一八四四）の頃、広島市研屋町に浅野家御用筆司に吉田清蔵なる人があった。

時に井上治平は、これについて製筆の法を学び又同じ頃、乙丸常太も摂津の有馬から製筆の法を修得し何れも帰郷して村人達にこれを伝へたのがその起りである。

山間で自給自足の出来なかつた一寒村は爾来農耕のかたはらこの副業に励んだ。

この結果熊野筆の名は漸次人の知るところとなり遂に現在では、全国毛筆製産額の八割を占める盛況を呈しその品質も亦著しく向上して所謂、東京筆を凌駕する優秀品を出すまでに進歩し、道の大家の絶賛を博すようになった。

これは全く井上、乙丸両氏の功に拠るもので時恰も熊野筆発生後百年に当たるので郷民相謀り其の偉徳を頌へその功績を永く後昆に伝えるための熊野町商工会の名に於いてこの碑を建てた。

昭和二十二年八月之吉

桂園 井上政雄

熊野村に於ける毛筆の生産は、頌德碑の弘化頃より早く天保五年頃と考えられ安政年間には確実に芸州筆として発展を遂げています。

